

第二次指導（五時間目）

子どもたち、本を開いて読みながら始鈴を待っている。

始鈴

さあ、御本を置いて下さい。

静かに礼

みかどのけらいが、
たくさんやつてきました。
そして、ゆみやかたな
をもつて、家のまわりを
とりかこみました。

「どうか、いつまでも
この家にいてください。」

おばあさんは、
かぐやひめをつれて
くらの中なかくれ
ました。

「だいじなむすめを、
わたしてなるものか。」

おじいさんは、くら
の前に立ちました。

よかつたね。手を下しなさい。それだつたらよくわ
ったでしょう。そのように、家に帰つて読んでみると、
よくわかります。
今日は六から読みます。六、七、八、九と読みます。
あなたから六、あなた七、あなたが八、あなたが九と読
みます。
今日も大きい声でゆつくり読むんだつたね。聞く人も
しつかりきいて下さい。

全員掌手

や姫を月の国へ帰したいのか、帰したくないのか。
○ 帰したくない
帝はどうだつた？

帰したくありません。そこで、どうしても帰さないよ
うに考えたな。
かぐや姫の一番近くで守つていたのは誰だつたか。
○ おばあさん

おばあさんです。おばあさんは、かぐや姫をどこにか
くしたの。

○ 倉の中
倉の中へ連れていつて、しつかり抱いていました。
倉の戸はどうしたか。

答 聞きとれず
かぎをかけたのね。（と答をうけられて）

一 よ む

二 と く

本をおきなさい。とてもよい読みでした。とてもしつ
かりした読みだつたな。聞く人もしつかり聞いていたね。

秋の十五夜の晩に、月の国から迎えにくることをかぐ
や姫はいつ頃から心配しておつたか。

○ 秋
？ 秋になってからか。あなたは。

○ 春
春からです。春から、毎晩々々月を見ると悲しそうな

顔をしていました。春が過ぎて夏が来て、夏が過ぎて秋
がやってきました。

いよいよ今日は十五夜の晩になりました。かぐや姫は、
月の国へ帰りたいのか それとも帰りたくないのだろう
か。

○ 帰りたくない
帰りたくないのです。おじいさんとおばあさんはかぐ
か。

家のまわりはどうです。

- みかどの家来が
たくさんの家来たちが、うちのまわりを囲んで、誰も
はいってこられないようにしているの。

家来たちは何も持たないで守っていたか。

- 弓矢や刀を持って守っていました

來たらやつてやるぞ！ ところ（動作）もつて待つてい
るの。

こんなにしているのだから、とってもとっても、来れ
ないさ。來たらこれで（弓や刀で）バサーン！ とやられ
てしまう。それでも中へ入っていくと、おじいさんにつ
かまつてしまふ。戸はしっかりしまつていて、かぎはビ
シャーンとかかっている。

とつても、かぐや姫を連れていけないな。

いよいよ天人がやつて来ましたよ。

さ、今日は少し長けれど、九のところ、みんな書い
てみなさい。

体をまっすぐに書いて書きなさい。体をまげたらいい字
書けないよ。

三 よ む

四 か く

板書事項

月がのぼるにつれて、
あたりは、ひるのように
明るくなりました。

月のあたりに、ぼつ
かりと白い雲がうか
んだかと思うと、ど
こからか、うつくしい
おんがくがきこえて
きました。

みると、金色の車
をひいた、月の国の天
人たちが、雲にのつて
おりてきます。

家を守つていた

うん、これは 空のことでしょう。
そしたら、こつちはどこのこと。

○ 陸のこと

陸のこと。うまいこと言つたね。こちらは、おじいさ
んの家のことよ。

空を見てごらん。空にはとっても、きれいなものがた
くさんあるでしょう。何がきれい。

○ 金色の車（——を引かれる）

ピカピカピカピカ光つてる金色の車。とってもきれい。

その外に あなたは

○ 音楽（に——を引かれる）

音楽も美しい。あなたは

○ 月（に——を引かれる）

お月様、お月様がとってもきれいです。

あなたは、

○ 天人たち

これが（——を引かれ）とってもきれいでしょう。私た
ちが着ているものとは違うものを、天人は身につけてい
る。とってもとっても、きれいなの。
もう一つきれいなものあるでしょう。

五 よ む

本も帳面も机の中へしまつてしまいましょう。

○ 指點読

○ 指音読

六 と く

二区分される（段落が二段）

ここから（前半）こつちは、どこのこと書いてあるの
でしょ。

○ 月のこと

○あかるく
あなたは
○きもの

もう一つちゃんと書いてあるさ。

○白いくも(——を引かれ)

これがきれいなのよ。

お月様が、だんだん だんだん のぼつたら、とても
あかるい あかるい あかるい とっても あかるい、
昼のようになったの。

見てると月のあたりに、白い雲がぼつと浮いた。
これ(白い雲)天人たちの何だろう。

○天人たちの乗り物

天人たちの乗り物、金色の車、これもきれい。白い雲
のところからもビカビカビカビカピカ光りがで
るの。それといっしょに美しい音楽が聞えてきたの。
白い雲がだんだん だんだん だんだん こう(ゼスチ
ュア) 下におりてきましたよ。

そしたら、天人たちの姿が見えてきました。雲に乗つ
て、だんだん だんだん見えてきた。
きれいな着物を着て……天人が……だんだん だんだ

ん だんだん そして立派な金の車を引いてきた。
はじまり 帝の家来たちは どこにいたか。
どうしていたか。
家来たち守りながら、ああ、きれいだと見ていたの。
さあ、天人たちがおりてきた。あ、空からおりてきた。
そばに来たの。

そこで、これ(刀で切る動作)やるんだったろう。

これ(刀)役に立つたか。

○立ちません

これ(弓矢)役に立つたか。

○立ちません

どうして?

○目がくらんで

これ(目がくらむ動作)目がこうなってしまったの。

ああ、きれいだなあと見ておった。気がついてみたら、
どこに何があるかわからない。(目がくらむ動作)これ、ど
こを切つたらよいかわからないの。これ、どこをねらつ
たらよいか、わからないの。さあ、そのうち、かぐや姫
はどうしたか。外へ出でしまった。

かぐや姫はどこにいたのだったか。

○倉の中

倉の中はどうしていたか。

○あいていた

初めからあいていたのではないだろう。しっかりしめ
て、かぎをかけていました。それが、ひとりでに、する
するするとあいて、かぐや姫が、するすると出て行
つたの。

これ持つて(刀)待つていても駄目ではないか。何もし
ないうちに するするすると出て行ったの、帝の家来は、
來たらやるぞ……。おじいさんは、倉の戸はあけないぞ
……。おばあさんは、倉の中で、かぐや姫をしつかり抱
いているのだけれど、ひとりでに戸があいたのでは、何
ともこれはしようがないな。

かぐや姫は、どうとう帰らなければならぬことにな
つた。

少し早いけれど、今日はみんな一所懸命勉強したから
これで終ります。

あしたは、一番最後、天にのぼっていくところをやる
よ。

前列の女の子が「十番をやるのね」と、にこにこしながら

七 よ む

板書一回

残念だつたな。一所懸命守つていたのにね……。

あしたは、初めから読んで勉強するよ。

礼

	時間	三十六分
一、よむ	一、	四分
二、とく	二、	六分
三、よむ	三、	六分
四、かく	四、	十二分
五、よむ	五、	二分
六、とく	六、	十一分
七、よむ	七、	一分

明るくなりました。

月のあたりに、ぱつ
かりと白い雲がうか
んだかと 思うと、ど
こからか、うつくしい
おんがくがきこえて
きました。

みると、金色の車
をひいた、月の国の天
人たちが、雲にのつて
おりてきます。

家を守っていた
みかどのけらいたちは、
月の光で目がくらみ、
どうすることもでき
ません。

くらの戸は、ひとりで
にあきました。かぐやひめ
は、いつのまにか、そとへ
でてきました。

一 よ む

一のところを開いておきなさい。
それじゃ始めましょうね。

れ

昨日家でお勉強してきたでしょう。今日はいよいよ、
おしまいだね。

一から十まで読んでもらいましょう。

順番を確認なさる

読む——男・男・男・女・男・女・男・女

本をおきなさい、体を真直ぐにしましょう。とてもよ
かつたね。

二 と く

かぐや姫を下で守っていたのは、どういう人たちだっ
たか。
守っていたのは誰？

○ みかどのけらいたち

帝の家来たちです。それから、あなたは

○ おじいさんとおばあさん
帝の家来や、おじいさんとおばあさん、みんなこれ人
でしよう。人間でしよう。

人 と板書

かぐや姫を迎えてきたのは誰でしょう。

○ 天人

と板書

天人たちです。こつちは帰すまいと思って守っていた
人間たち(板書で)こつちは かぐや姫を迎えてきた天人
たち。

○ 天人たち

天人たちです。弓や刀を持っていたのはどつちか。
どつちが強かつたか。

○ 天人

と板書

天人們は持っていない。弓や矢を持っていませんで
した。刀も持つてきませんでした。
人間たちは、かぐや姫をどうしても帰さないと、いろ

いろくふうしました。くふうしたのは、人間です。
かぐや姫とおばあさんは、倉の中にかくれて、戸をピ
シャンとしめていました。そしたら、もう外から見えな
いだろう。そのまわりを帝の家来たちがとりかこんだの。
こんなに(動作で)とりかこんだのだから、天人たちは何
としても、とりかえすことができないだろうと思つたの。
ところが、天人たちが雲にのつて、天からすうとお
りてきて、かぐや姫を迎えてやつてきたら、帝の家来た
ちは、目をあけていることができないの。帝の家来た
ちは、これ(目をしょぼさせた)
これをやろうとしても(刀をぶりあげ)これをやること
ができないの。

これをやろう(弓をうつまね)としてもこれをやること
はできないの。

どうすることもできなかつたの。倉の戸、スヌスと、
ひとりでに出てしまつたの。かぐやひめにもどうするこ
ともできなかつた。
もとのかぐや姫はふしげな力をもつていただろう。竹
の中にはいつていた。竹の中からいろんな宝物だした。
手のひらにのるようにも小さかつたのが、たつた三月ほど

第二次指導(六時間目)

で大きい姫になつたでしょう。

こんな不思議な力を持っていたかぐや姫だが、天人たちはかなわないの。倉の戸がひとりでにあいて、するすると出でていってしまったの。

かぐや姫は、どうするよりしようがなかつたの。

○ 天へ帰るよりしようがなかつた

天人が迎えにきたら、するすると倉の中から出たかぐや姫の言ったことばを書いて下さい。

それから、しまいのところも書いて下さい。

はじまりのことばは、しまいのところは、天にのぼつていくところを書いて下さい。

丁寧な字で書きましょうね。

三 よ む

四 か く

五 よ む

その板書が印象的である。

板書事項

師弟共に書きはじめる。
板書の位置—かぐや姫のことばと天にのぼるところとの中間に空白をとられる。
時間と空間を、空白で現されているように思われる。

六 と く

みんなしまつて下さい。
声をたてないで読んで下さいね。

指點読 一回

指音読 一回

こつち とこつちで(姫のことばを「けつしてわすれません」のところで二区分されて)どつちが値打あることばかな。

○ ?

どつちだかわかりません と思う人。

こつちの方(前半)だと思う人。

挙手多数

こつちの方(後半)だと思う人。

○ ?

こつち(前半)の方で、とても立派なことば 一番立派だと思うことばは、どのことばか。さすが かぐや姫だなあということば。

○ 「おんは決して忘れません

これよ、これよ。(□でかこまれる)

これはとつても立派なことばです。ご恩は決して忘れません。ご恩と言つたら何です。

○ ?

おじいさんやおばあさんに、とつても とつても とつても大事にしてもらつたでしょう。そのことです。

ご恩は、決して忘れません。忘れませんというのは、天に帰る時言つたのね。わけますよ。

どうすること?

○ ?

いつでも、おじいさんや おばあさんをどうすること。

○ 思い出す

思い出していることです。おじいさんやおばあさんにかわいがって育ててもらったことを、とっても考えています。いつまでも いつまでも忘れないで思い出すことです。

かぐや姫はいつまでも忘れない。おじいさんやおばあさんは忘れられてもよいの。

○ 忘れられん方がよい

そこで、こつち(後半)は かぐや姫が、おじいさんやおばあさんに お願いしているの。

○ 思い出して下さい

忘れられたらさびしいさ。どうか私のことを思い出してくださいとたのんでいるの。おじいさん おばあさんの所に、かぐや姫という子がいたことを思い出してください。

私はおじいさんおばあさんのことは決して忘れません。おじいさんもおばあさんも、私のことを忘れないで下さ

月の光です。きれいなかぐや姫に 月の光があたって、とてもきれいになりました。

○ 月の光

天人の着物は、今まで着ていた着物にくらべてどう? とてもきれいなのです。きれいなかぐや姫がきれいな着物を着ました。

その上、ますますかぐや姫をきれいにしたものがあり

い。月のいい晚、だけでも思い出して下さい。そう言ってさ、これ言つたあとから、かぐや姫はどうしたの。ただ天へ帰つては行けないの。なにをしなくてはいけない?

○ 天へ行つた

かぐや姫はいつまでも忘れないで思い出すことです。

○ きものをきる

天に帰るには、天に帰るための着物を着なくてはならないの。

○ きれい

とてもきれいになりました。きれいなかぐや姫がきれいな着物を着ました。

○ 月の光

天に帰るには、どうし

なくてはならないかな。

○ 車にのる

金色の車。ピカピカ ピカピカ ピカピカ光る車に乗

なんにも見えなくなつたの。音楽はどうだらう。
○ 聞えなくなつた

おじいさんとおばあさんは、それをじーっと見ておつたのでしよう。だんだん だんだん車が小さくなつて、

いよいよ見えなくなり、音楽が聞えなくなつたら、おじ

いさんとおばあさん 悲しかつたろうね。

「かぐやひめ。かぐやひめ。かぐやひめ。」と

呼んでも、もう届かないところへ行つてしまつた。とつ

ても悲しかつたろうなあ。

少し間をおいて

とってもふしぎな力を持つたかぐや姫だったが、天へ

帰つてしまつた。天人にはかなわないの。人間も天人にはかなわないの。

こういうお話だね。

○ 小さく

だんだん小さくなつて、車のまわりを天人たちがとりまいている天人。そのあたりからきれいな音楽が聞えてくるの。

それが、だんだん だんだん小さくなつて、しまいにはどうなつただろう。車は、いつまでも同じように見えたかな。

○ 見えなくなつた

七 よ む

帝の家来は、ぼうつとしてながめていた。

これはこれは、大変なことになつたものだと。七、よむ の後にこのように感懐をつけ加えられると、情景が、すっと広がり、余韻が流れます。

所要時間	一、よむ	二、とく	三、よむ	四、かく	五、よむ	六、とく	七、よむ	八分三十秒
								六分三十秒
								一分
								十二分
								二分

板書事項

かぐやひめをのせた
金色の車は、しづかに、
天へのぼつていきました。
天人たちのおんがく
も、しだいにとおく
なりました。

月

人 天人
「いろいろおせわに
なりました。〔ごおん〕
は、けつしてわすれません。」

月のいいばんには、
どうか、わたしのこと
を思いだしてください
さい。」

きもの

三 ブレーメンのがくたい〔三年〕

昭和四十二年一月三日から六日まで開かれた、青森県南
部町平良崎小学校教壇修養会における御教壇である。五日、
六日の二時間のお取扱いである。

一 教 材